入選

電車でのできごと

長野県　三郷中学校　三年
坪田　晏奈

習い事の帰り、一人で電車に乗ったときのことだ。その日は、いつもよりも車内が混んでいて、私はドアの前に立った。私が立っていた隣に、ベビーカーが置いてあった。どうしてベビーカーだけがあるのだろう、と思っていると、すぐ近くに赤ちゃんを抱えたお母さんがいて、ベビーカーの持ち主はそのお母さんだということがわかった。

電車に乗ってから、一つ目の停車駅に着こうとしていたとき、車内に泣き声が響き渡った。それは、先ほどのお母さんが抱えていた赤ちゃんの泣き声だった。周りの人の視線が、お母さんと赤ちゃんに集まった。でも、私を含めた周りの人は、見つめることしかできないでいた。お母さんが少しでも早く泣き止ませようと、焦っている姿がとても印象に残っている。

私は、何もできないことに、少し罪悪感を持った。話しかけるのには、とても勇気がいるし、たとえ話しかけたとしても、赤ちゃんを泣き止ませることもできず、お母さんを困らせるだけかもしれないし、と心の中で何度も思った。そうして、罪悪感を打ち消そうとした。

赤ちゃんが泣き止む気配は、無かった。赤ちゃんを抱えたまま、何とかして泣き止ませようとするお母さんは、おもちゃを見せたり、窓の外の景色を見せたりして、赤ちゃんの気を紛らわそうとしていた。でも、その位置からは窓の外の景色が見えないようで、あまり効果は無いように見えた。

ふと、今私がいる場所は、景色が見えることに気づいた。車内が混んでいるとはいえ、場所を交換することはできた。声をかけようか迷ったけれど、後でやっておけば良かったと後悔するのはいやだと思い、そのお母さんに近づいて、

「あの、場所交換しましょうか。」

と、声をかけた。周りの視線が、私にも集まった。

「すいません。ありがとうございます。」

と、お母さんが言って、場所を変わった。なぜ交換する必要があるのかと思われるか心配だったが、交換できたので良かった。

その後、泣きつかれたのか、場所を交換した効果が出たのかわからないが、赤ちゃんは泣き止んで、すやすやと寝ていた。お母さんは、安堵していた。

私が降りる駅に着いたとき、そのお母さんが近づいてきて、

「さっきは、ありがとう。気を使ってもらえて、嬉しかった。」

と言った。私は降りなければならなくて、返事をすることもできなかったけれど、お母さんは出発してからも、私が見えなくなるまで手を振ってくれていた。

勇気を出して良かった、と思った。